

オーラルヒストリーの手法による核融合の歴史研究

市川芳彦氏インタビューを通して

Historical Research on Fusion Research Based on Oral History Method by the Interview to Yoshi-hiko Ichikawa

木村一枝、井口春和、難波忠清、松岡啓介

KIMURA Kazue, IGUCHI Harukazu, NAMBA Chusei, MATSUOKA Keisuke

核融合科学研究所

National Institute for Fusion Science

1. オーラルヒストリーとは

歴史をひもとく時に、文献資料の欠落や資料間の関連が不確かなため、必ずしも史実が明確でない場合が多々ある。核融合アーカイブ室では、核融合研究の歴史的な流れをより明確に記述するため、文献資料を補うべく、関係者を対象とするインタビューを行い、オーラルヒストリーとして記録に残す活動を行っている。

オーラルヒストリーには、二つの形態がある。

(1) テーマを設定し、関連する話題に集中したインタビューを行うもの。

(2) 一人の人物のライフヒストリーに注目してインタビューを行うもの。

2. インタビューの実施から資料化まで

インタビューの計画から始まり、最終的に歴史資料として登録・保存するまでの手順は、およそ以下の通りである。

テーマの設定、およびインタビュー어의選定



資料調査と質問状の作成、送付



(資料によるインタビューーからの事前回答)



インタビュー実施(一人、または複数のインタビューアー)



テープ起こし



編集(インタビュー参加者全員による文章校正)



印刷、アーカイブズ資料として登録・保存

3. 市川芳彦氏インタビュー

今回は、プラズマ物理学の進展に大きく貢献し、物理学会会長を務めた経歴を持つ、市川芳彦核融合科学研究所名誉教授に対し、2012年9月28日及び11月27日の2回に亘って、ライフヒ

ストリーとしてのインタビューを行った。

4. インタビュー概要

(1) 基礎物理学研究所における共同研究：

東北大学の3年生(旧制)の時に基研の長期研究員として原子核反応の研究會に出席したこと、また1953年9月日本で戦後初めて京都で行われた国際會議「理論物理学に関する国際會議」に参加したこと、を振り返り、研究者間の議論とコミュニケーションの大切さを語った。

(2) 日米科学協定以前にあった日米セミナー：1960年代後半にアメリカから帰国した長谷川晃氏と相談して日米セミナーを始めた。若い研究者が国際交流の意義を認識し積極的に海外に出かけるきっかけとなった。

(3) 早くから核融合研究者を輩出した日大：日大の古田重二良會頭は日大に原子力センターを設立したいと思い、湯川秀樹に相談した。この時湯川は原子核物理などの基礎研究から始めるべきであると物理学科の設置を提案した。日大に招へいされた市川は、プラズマ物理の理論部門で多くの核融合研究者を育てた。

(4) 市川・木原論争とは：

1962年パリで開かれた「夏の学校」における木原太郎東大教授の講演に納得できなかった市川は、執拗に議論をしたため、木原から礼儀をわきまえないと怒りを買った。しかし、地位にこだわらない学問論争は若手に刺激を与えた。

(5) 研究成果と論文数は相關するか：

研究の成果やレベルを定量的に把握するのは非常に難しいが、Science Metricsとして計量的分析や評価を行うことは意味があるし面白い。

(6) プラズマ理工学国際會議(ICPP)：

1980年に日本で初めて開催されたICPPは、第4回プラズマの波動と不安定性国際會議と第4回プラズマ理論キエフ會議の合同會議だった。

Physicsは、狭い意味の物理学ではなく広い分野を指すので、會議の日本語名では理工学とした。